

空海の世界と智の構造

著者	村上 保壽
号	108
発行年	1995
URL	http://hdl.handle.net/10097/14392

むら かみ やす とし
村 上 保 壽

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 108 号
学位授与年月日 平成7年7月13日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 空海の世界と智の構造

論文審査委員 (主査)

教授 華 園 聰 磨 教授 篠 憲 二
教授 玉 懸 博 之

論文内容の要旨

本研究は、空海が真言密教の教理書として撰述している主要な著作（『辯顕密二教論』、『即身成仏義』、『声字実相義』、『吽字義』および『秘蔵宝鑰』）を取り上げて、真言密教の教理と思想の構造を密教の「智」の問題を中心に解き明かし、空海の基礎理論を明確にすることを目的としている。方法論的には、空海が何を語ろうとしているのか、それによっていかなる世界観を明らかにしているのかという問題を各撰述書の文脈の中から客観的に読みとり、その思想を「智」の体系として解釈し、組み立てることを意図している。

序章においては、空海の密教思想の全体的な展開と特徴を彼の撰述活動全体を概観することによって明らかにしている。

1 空海における密教思想の基調では、その展開と特徴を把握する支店として、空海の撰述書に一貫している思想的基調に着目している。その基調は、空海の早い段階に求めるならば、唐から帰国後朝廷に提出した『御请来目錄』に見ることができる。空海はこの書において密教の優位性をもとに顕密二教の教相判釈（教判）を論じている。そこで、この教判の思想を空海の思想的基調とすることによって、彼の密教思想を一つの視点から全体的に概観し、その展開と特徴を捉えることができると思う。

2 空海の密教思想の展開と特徴では、その展開と特徴を把握するために各撰述書の撰述時期と

撰述順序を特定する考察を行っている。そして、この考察を通して空海空海の密教思想の展開と特徴を全体的に概観している。具体的な考察としては、顕密教判の思想から空海を『二教論』撰述（弘仁四、五年頃）の初期と『即身義』、『声字義』、『吽字義』のいわゆる三部書撰述（弘仁十年前後から天長初年頃）の中期と『十住心論』、『秘蔵宝鑰』撰述（天長七年頃）の後期の三期に区分できることを論究している。そして、初期の思想が密勝顕劣の教判の立場から顕教と密教の相違とその特徴を論じており、中期の思想では密教の成仏を「即身成仏」と捉え、その成仏の智の構造と三密加持の世界について語っていることを概説している。後期の思想では顕密を包摂する教判論である十住心思想を中心に真言密教の思想が論じられていることを説明している。

最後に、この章を結論として、この三期を通して空海の密教思想を全体的に捉えるとき、その教判論の思想的基調の上に展開している彼の主題が即身成仏の「智」にあることを明確にしている。そして、その智の問題が即身成仏の境界とその構造の論理（智の構造）を問題にすることにはかならないことを明らかにしている。そして、本研究が次の二つの問題、すなわち一つは即身成仏の境界とはいかなる世界であるのか、その世界の実相を明らかにすること、二つはその境界が法（身）仏の「智」として明かされているとしたら、その「智」の覚知（認識）とその構造とを明らかにすること、という二つの問題に焦点を当て、空海の真言密教の思想と「智」の問題を考察することを述べる。

第1章 真言密教の視座と『二教論』

この章では、『二教論』の中で、空海が把握した密教世界の本質とその思想を考察している。

1 『二教論』の性格では、『二教論』の意図が顕密二教の優劣・浅深を明確にする教判にあることを明らかにしている。空海は、法相・三論・天台・華嚴といった四家大乘（顕教）の教えが応身仏や化身仏の教説であり、相手の宗教的素質（機根）に応じて説かれた相対的な教え（対機説法）であり、したがって顕略であると捉えている。それに対して、密教の教えは真理そのものを直接に説いている法身仏の説法（法身説法）であり、その内容は秘奥であると理解している。この顕密把握から、空海がこの書で最澄を意識しながら顕教とくに天台批判を展開していることを論究する。それによって、『二教論』が当時の仏教界に対して、密教を最上乘の仏教として位置づけることを意図し、新来の密教を立教・宣揚流布するための撰述書の性格を強く持っていることを明らかにしている。

2 法身説法と密教の正当性では、空海が仏教内部における密教の位置づけを密教の正当性を証明する論理と密教の独自の世界観の二つの側面から論じていることを考察している。まず、仏教内部での密教の正当性を証明する論証とは、諸経論に法身説法を読み取ることのできない顕教の学匠に対する批判であり、その批判を通して顕密の諸経論から法身説法を取り出し跡づけることにすると明らかにする。そして、法身説法の密教と対機説法の顕教という密勝顕劣の教判を通して、空海が顕密二教の本質的相違を説法する仏身と説法内容との違いという両面から論じていることを明らかにし、そこから、空海が密教世界の本質と独自の世界観および思想性を開示していることを論じている。

3 顕密の視座と智の地平では、顕密の本質的相違をそれぞれの視座の智（知）の地平の相違として捉えることによって、密教の視座と智の地平を考察している。さらに、法仏の説法が「ことば」

によって明かされ、法仏の「さとりの」境界が「こころ」において思慮されるとしたら、空海が顕密の本質的相違を顕密の「ことば」と「こころ」についての理解の相違にあると考えていることを明らかにする。そして、顕密の視座と智（知）の地平の問題を取り上げて、顕教は相対的な因位（修業の段階）の地平から絶対的な果分（仏のさとりの境界）への方便を説いているにすぎないが、密教は果位（法身仏の境位）から絶対の真理（さとりの智慧）そのものを明らかにしているという空海の論旨を明確にする。そして、法（身）仏の智の世界は、主客の相対性の地平を離れた絶対性の智の地平においてはじめて開示されたと考えている空海の密教理解を考察する。次に、この智の地平が密教の独自の「ことば」と「こころ」の世界においてはじめて開かれていること、この世界への通路が仏と行者の身語意の三密瑜伽（三摩地）にほかならないと把握されていることを明らかにする。

4 世界についての密教の態度では、三密瑜伽の意義について考察している。空海にとって三密瑜伽とは、世界と存在そのものに対する密教の基本的態度であると同時に、仏の「さとりの」境界・世界と存在の実相を把握する密教の視座への通路であることを考察する。そして、三密瑜伽においてはじめて、仏と行者がこの身このままに一体となり、絶対的な境位・即身成仏の境位に立つことができると考えていることを明らかにする。そして最後に、三密瑜伽において現前する世界が空海の把握する密教世界にほかならないことを論じている。

第2章 「即身成仏」の思想と構造

この章では、空海の密教思想の中心概念ともいえる「即身成仏」の概念を解明するとともに、即身成仏の構造が三密を成立の要とする智の構造にほかならないことを考察し、空海の即身成仏思想の本質を明らかにしている。

1 即身成仏の意味と構造では、まず空海が即身成仏思想を顕密教判の問題としてではなく、密教経論にもとづく独自の密教の成仏思想として論じていること、そして、この思想が天台の説く即身成仏思想とは異なる成仏思想として空海に意識されていたことに触れる。次に、空海が即身成仏の意味を顕教の三劫成仏に対する成仏の時間的速疾性の意味から捉えているのではないことを「六大無碍の頌」（即身の頌と成仏の頌で構成）とその釈の意味内容を解明することによって明らかにする。そして、空海が即身成仏思想を「即身一成仏」の思想として説明していることから、彼において即身と成仏が異なる存在事態であり、この両者を結びつける第三者においてはじめて即身成仏思想が完成すると考えられていることを考察する。その上で、空海がこの即身一成仏の構造から世界の存在性と存在の真実相および成仏の智の構造を明らかにし、それによって独自の真言密教の成仏思想を提示していることを論じている。

2 即身の頌の存在論的意味では、空海が即身の頌に付けた釈の意味解釈から即身の存在論意味を考察している。まず、空海が即身の本質（体）を六大（五大と識大）、その相を四種の曼荼羅（現象世界）、その働きを三密と捉えていること、そして、即身の世界が五大（客体）と識大（主体）・主と客の二元的対立を越えた三密加持の境位においてはじめて開示されたと考えていることを明らかにする。さらに、現象世界の多様な姿（相）である四種の存在相（四曼）が三密の境位・地平に顕現している「一」なる六大の現象にほかならないと捉えていることを明らかにする。このような解釈を通して、空海の即身の意味が三密の地平に立ち現れる自体性の顕現である存在相すなわち

仏身の意味にほかならないことを明らかにする。

3 「時と場」としての「三密」では、仏と衆生との無碍渉入の境位である三密加持とは、まず六大・四曼の存在性と存在相が顕現する「時と場」であることを考察する。次に、三密が世界の実相・真理を法仏の智として開示する境位・智の地平であることを明らかにする。そして、この三密の働きが世界認識の密教的論理にほかならないことを論究している。

4 密教の智と三密の問題では、成仏の頌に付けた空海の釈から、密教の智と成仏の智の意味と論理を解明している。まず、空海が密教の智を真実智（認識知）と成仏の智に分けて捉えていることを考察する。そして、空海が成仏の智の認識知ではなく実践的な知（智）として捉え、それを実覚智と規定していることの意味を考察している。その上で、空海が存在の地平に法仏の智（価値）を顕現させ、存在を智（価値）に転換している論理を考察し、三密を転換の論理として世界の実相を真実智へ、真実智を实践智へ転換している論理構造を明らかにする。最後に、空海の即身成仏の思想とは、三密を唯一の通路として即身と成仏が「一」なる即身成仏として完結する構造を持った成仏論であることを述べる。そして、それが最澄などの即身成仏思想との決定的な相違点であることを明確にする。

第3章 「声字実相」の存在論的意味

この章では、三密加持の成立契機である法（身）仏の「ことば」・真言とその働き・語密を取り上げて、空海がその「ことば」とその働きをどのように捉えているのか、その「ことば」によっていかなる世界の実相・真理が開示されると考えているのか、そして、その世界を把握する智がいかなる智慧を明かしているのかという問題を「声字実相の頌」とその釈の意味解説から解明している。

1 「声・字・実相」の意味では、まず声・字・実相とはいかなる意味の概念であるのかという問題を顕密の「ことば」理解の相違を通して考察する。それによって、空海が五大（現象世界）の声・字を主観的認識の「ことば」ではなく、世界の実相を直接に開示している法化の「ことば」と捉えていること、したがってこの世界の一切の声字が主客の対立の消滅した主体＝客体世界の言語活動にほかならないと理解していることを明らかにする。

2 六離合釈と智の意味では、空海が声字と実相の対応関係を論じている五種の解釈（六離合釈）を取り上げて、声字の外に実相なし、声字は即ち実相であるとする論拠を考察する。そこから、声字と実相が「一」なる全体概念・「声字実相」と把握されていること、空海がその声字実相の世界こそ法身仏の世界・絶対的真實相の世界であると理解していることを明らかにする。そして、空海がかかる声字即実相の把握に密教の智の意味を見いだしていることを明らかにする。次に、空海がこの智を世界の真實相を知る智・認識知と自利利他を实践する智・実践知の二つの意味から捉えていることを論究する。

3 六塵の文字と世界の存在相では、空海の声字実相の世界の意味を明らかにするために、「ことば」の存在論的意味を考察している。まず、現象世界を表象する「ことば」・六塵の文字が「いろ」と「かたち」と「うごき」を持った個別的存在者の重々無尽の世界（存在の差別相）を明かしていること、そして、この六塵の文字によってはじめて存在者の存在相が世界の地平に浮かび出てくると捉えていることを考察する。次に、空海が現象世界の存在相（差別相）を身心と環境の相互の関係性（互為依正性）において捉えていることを明らかにする。

4 存在の両義性と「能悟」では、空海がこの世界を世界として現象させている存在の原理をいかなる意味において捉えているかを考察している。まず、空海がその原理を法然・随縁という存在の両義性を意味する概念によって捉えていること、そして、その在り方が法身仏の顕現であり、世界の存在相にはかならないと考えていることを明らかにする。次に、法仏の「ことば」・真言の開示する世界の実相とは、個別的存在世界（存在の差別相）が法然と随縁という存在の両義性を原理として顕現していることにかならないとする空海の論旨を考える。最後に、存在の差別相と存在の両義性の把握（認識）が密教の智の在り方であり、同時にその智が自利利他を实践する智と実践の主体性を明かしていることを考察する。そして、『声字義』における密教の智が真実知（認識知）と実践知の意味を含意していること、それが『即身義』よりもはっきりしていることを述べる。

第4章 『吽字義』と「ことば」の思想性

この章では、空海が世界自体のことばとして捉えている法（身）仏の「ことば」（真言・陀羅尼）の意味を「吽」字の分析的意味と総合的解釈を通して明らかにしている問題を考察する。

1 「吽字」の問題では、何故、空海が吽字を問題にするのかを伝統数字の説や『即身義』、『声字義』との係から考察する。そして、それは空海が真言密教の本質を明らかにする上で吽字（梵字）の構造分析と字義解読の必要性を考えていたこと、吽字の問題とはその分析と解読を通して実践的智の主体である意密を明らかにすることであると考察していることを論究する。

2 「ことば」の意味と顕密の理解では、まず『吽牛義』が『声字義』とは異なる「ことば」の意味を開示しようとしている問題を取り上げる。そこから、存在の真実相に直接迫ることのできる「ことば」（梵字）とその字義を問題にする空海の関心を考察する。そのために、吽字を何・訶・汗・廐の四字に分析し、その字相・字義を明らかにする空海の論証を追求し、顕教はことばの字相のみを理解するが、密教をことばの字義・実義を理解するが故に法仏の智慧を把握しているという空海の「ことば」理解を明らかにする。

3 『吽字義』の世界観では、吽字の四字の神秘的意味（真実義）を解釈することによって、四時の字義・実義が開示する密教の世界観について考察する。そして、吽字の四字が世界の実相・真理の不可得であることを明かしていること、したがって、空海が世界の真実相を因縁（因果関係）や言説によって規定することができないと考えていることを明らかにする。そして、「ことば」・真言に内在する真実義を取り出すとき、世界と一切の存在者が存在の事実性（真実相）において顕現してくるという空海の世界観を明らかにする。

4 「吽字」の実践的意味では、吽字の総合的な真実義を明らかにし、その思想性に注目している。そして、吽字の総合的意味が三密瑜伽における主体性・意密の二つの意味を明かしていること、すなわち観法における「さとり」の主体性と法仏の智を实践する主体性の意味を明かしていることを論じている。前者については、蛇羅尼を旋転する三密の観法によって存在の真実相を「さとり」の智慧に転換している論理を明らかにする。後者については、空海が実践知（智）を因・行・果の問題として捉えていること、そして、その形式がすべての菩薩の実践形式であり、具体的には、それは「菩提心を因と為し、大悲を根と為し、方便を為す」という「三句の法門」以外の何ものでもないと捉えていることを明らかにする。最後に、この「三句の法門」の形式を内容から吽字が「さとり」の智慧である菩提心を因とする実践知（智）の在り方を明かしていることを論じる。それは、

空海の世界観が世界をいかに解釈するかではなく、いかに「さとり」の智慧を実現するかということに描かれていることを理解することである。

第五章 密教の「智」と『秘蔵宝鑰』

この章では、『秘蔵宝鑰』が『十住心論』とは異なる視点から十種の住心を問題にし、仏の真実の教えを「知る」心の在り方（知・智の在り方）とその展開を明らかにしていることを考察する。そして、そこで解明される顕密の知（智）の本質と構造についての空海の評価から密教の智の意味内容を明らかにする。

1 第十住心の構成と問題では、空海が第十秘密莊嚴心の綱要を述べている十二句の偈頌の解明から、彼が知（智）のレベルにおいて十種の住心を世間心と出世間心、小乗（二乗）と大乘、菩薩乗と仏教とに区別していることの意味を問題にしている。そして第十住心の思想理解には第一乃至第九住心（前九種住心）の思想がその成立契機となっていると捉えるべきことを論じている。

2 秘密莊嚴心の智の境界では、まず、空海が第十住心の智を『即身義』の六大思想を踏まえて考えていることを明らかにする。次に、空海がこの住心の説明を『菩提心論』三摩地段全文に依拠していることから、この三摩地段的意味内容を解明する。そして、そこでは密教の智が普賢大菩提心に住する智として捉えられていること、その智が実相の認識と同時にその実現の智慧でもあることを明らかにする。また、『即身義』では成仏の智・実覚智の意味内容と構造がいま一つ明確ではなかったが、ここでは、空海は即身成仏の智・第十秘密莊嚴心の智を普賢大菩薩の行願の境位に明かされる智として捉え、「知る」と同時に「為す」ことの原理を覚知する全体知（智）として明確に把握していることを論じる。

3 前九種住心における智の契機では、空海にしたがって前九種住心を世間心、二乗、菩薩乗および仏乗に分け、知の概念を認識知と実践知に区分してそれぞれの住心の知の本質と構造を考察している。そして、各住心のいかなる知の内容や思想が第十住心の成立契機となっているかを明らかにする。また、それにともなって、空海の各住心理解が顕密教判の思想（十住心思想）を語っていることを明らかにする。

前九種住心について具体的にすると、空海は、まず世間心の知の本質が根本的には自己中心的であり、さまざまな欲望に突き動かされ、因縁の道理と自心の本来性（仏性）に気がつかず、対象存在のみを志向する主観的認識知のレベルにあると捉えている。二乗の知については、空海はこの知が苦と無明の根源（煩惱）を滅するさとりの智慧を自心の在り方に求めていることを認める。しかし、その知の根本はエゴイズムであり、ついに自心の実相を覚知することなく終わっているという。菩薩乗の知は、さとりの智慧を自利利他の実践に求めていることにおいて第十住心の実践知（智）につながるが、その認識知は主客に分裂した相対知であるとしている。そして、仏乗の知は、唯識・中観の第六・第七住心の知の否定性を越えて肯定的知の地平を開示しており、その限り、第十住心の智のレベルを示しているが、知の主観性を維持していることにおいて法仏の智（全体知）の世界を切り開いていないと捉えている。

最後に、空海は、前九種住心の認識知が法身説法と三密加持の世界を持たないが故に、本質的に主客に分裂した相対知に終わること、そして、顕教の知が自心に「さとり」の智慧を求めているにしても、その心の実相を認識対象として客体化しているところに顕教の知の限界があると考えてい

ることを明らかにする。

4 瞑想と知（智）の関係では、宗教的知の地平が超越的世界や超越者を瞑想する行体験において開かれていることから、第三住心以降の瞑想・欽想と知（智）の関係について考察している。まず、第十住心の瞑想・三摩地（三密瑜伽）の独自性を他の住心の瞑想・三昧との比較論的考察から明らかにする。そして、第十住心の三摩地が普賢大菩提心の智を出生する瞑想であり、この境位においてはじめて全体知である密教の智に到達できると考えていることを明らかにする。さらに、その含意として、一つは衆生救済の実践行に瞑想の意味を見い出している第六・第七住心の禅定思想の存すること、二つは世界の実相を一心の本性に観じとる法華三昧と華嚴三昧の到達レベルを踏まえて、密教の智を開示する真言密教の瞑想・三昧加持が成立していることを明らかにしている。最後に、空海の把握する智の構造と地平が「さとり」の智慧を知ることではなく、その智慧を実現する世界へ向かって開かれていることを論じている。

終章では、これまでの各章で考察してきた空海の世界と思想性および智の構造について、その本質と意味を全体を概観する形で整理している。そして、空海の智の概念が宗教一般の知の概念に還元できる普遍性を持っていること、しかし、一切の主客の相対性を離れて直覚される密教の智が顕教よりも神秘主義を強めていることを明らかにする。最後に、密教の現世利益的呪術的性格は、中国晩唐の密教が示すように、密教を呪術的民間宗教に墮落させる可能性をつねに持っていること、しかし、空海の密教思想にある智の普遍性が密教の内包する墮落の危機を回避させてきたことを述べる。

論文審査結果の要旨

本論文は、真言密教の教理並びに実践を確立し、日本仏教史に巨大な足跡を残した空海を、宗学の伝統を踏まえつつ、世界観、存在論および認識論の視野から捉え直そうとする試みである。構成は「まえがき」に続く、六の章から成っている。

「序章」では、まず空海の思想の基調が明確にされたのは弘仁四、五年頃の『辯顕密二教論』以後であるという見解を立て、それに続く主要な著作、即ち『即身成仏義』、『声字実相義』、『卍字義』、『秘密曼荼羅十住心論』および『秘蔵宝鑰』などによつて、即身成仏の思想から十住心の思想に至る空海の思想を展開を素描している。そしてその中心思想を即身成仏思想と捉え、そこに見られる世界観と智の構造の考察が主要課題になる旨が述べられる。

「第一章 真言密教の視座と『二教論』」では、『辯顕密二教論』を空海の立教宣布の書とみなし、空海が、密教を法身説法であって、応身仏や化身仏の対機説法の及ばぬ秘奥であると論じ、とりわけ最澄の天台宗を年頭に置いた議論を展開しているとする。次に顕教は因位の地平から果分への方便を説いたに過ぎないのに対して、密教は果位から真理を開示していること、法身仏の智の世界は相対性の地平を離れた絶対性の智の世界であること、そしてその地平は三密瑜伽によって開かれること、を空海が主張したとし、それ故に密今日における「ことば」と「こころ」が改めて問題になるとする。

「第二章 『即身成仏』の思想と構造」は空海の中心思想を「即身成仏」の思想と捉える。この

部分が本論文の枢軸をなしている。まず最初に『即身成仏義』における即身成仏の主張が密教の経論に基づいて論述されていることの意味に触れ、空海がこの思想を単なる教判の問題としてではなく、真言密教独自の成仏思想として把握しようとしていたことを示すものとする。即ち空海が「六大無碍の頌」を「即身の頌」と「成仏の頌」とに分け、即身と成仏を別個の意味内容を持つ概念とみていることから、即身成仏は総合判断的概念と理解すべきであるとの注目すべき見解を出す。次にこのような観点から即身・成仏の構造を究明する。空海は即身の「体」を「六大無碍常瑜伽」と捉えるが、それは、存在者の存在が障りなく、互いに交渉しあって永遠不変であり、そのまま真実で究極的な在り方として存在していることと解釈されるとする。続いて即身の「用」と空海が規定した三密加持の存在論的な意味が考察され、即身の用とは本有の三身・存在の実相と絶対的真理・法身仏の智をこの世界に「速疾に」顕現させる意味で「即」である「時」と、本有の三身が「現身に」顕現する意味で「即」(身)である「場」を瑜伽の世界に指定する働きであるとされる。こうして空海の即身成仏思想は、三密を通路として、即身と成仏が「一」となるという論理構造を持つ成仏思想であり、最澄等の即身成仏思想との相違は明白であるとする。

「第三章 『声字実相義』の存在論的意味」では、真言、即ち法身仏の「ことば」と語密、即ちその働きによって捉えられる世界の実相の特徴が論じられる。空海のいう五大の声字は世界自体(実相)の自己開示であるのに対して、六塵の文字、即ち現象世界を表象する「ことば」は色と形と運動を持つ存在者の差別相を表し、この「ことば」を通じて初めて存在者の存在相が世界の地平に浮かび上がってくると空海が考えていたと指摘する。次いで、空海が存在者の存在を法然と随縁から成るとした点を取り上げる。これは法身仏の依正・身土を論じたものであるが、存在論の文脈からみると、法然である法身仏が随縁の仏身として顕現するときには、絶対的真理相の個別化現象を意味し、存在の両義性を示すものであるとする。

「第四章 『吽字義』と「ことば」の思想性」では、法身仏の具体的説法としての真言・陀羅尼の意味が「吽」字の分析を通じて示される。空海の真の意図は、吽字の実義の把握を通じて無明煩惱に覆われた衆生が現実に、従って即身に仏智を獲得する道を教示することにあつたとする。そして空海が吽字を総合的な実践をもつとみなしていることを指摘して、それが法身仏の智の本質を表しているとともに、三密瑜伽における「さとり」の智をも示しており、吽字には、あらゆる仏と平等の境地に住することができる喜びの意味があると解釈する。

「第五章 密教の「智」と『秘蔵宝鑰』」では、『秘密曼荼羅十住心論』とは異なる視点に立つ『秘蔵宝鑰』を取り上げて、密教における智の特質を論じる。初めに第十住心と前九種住心との関係の理解に関する基本的な視座を論じ、次いで、空海が、顯教においては菩薩乗の知の相対主義を克服した仏乗にも相対主義が払拭されていないとの見地から、第十住心・秘密莊嚴を定立した経過を辿る。最後に第十住心の冥想・三密瑜伽と第三住心以降の冥想・観想を比較し、第十住心の三摩地は普賢大菩提心の智を生み出す冥想であり、この境地において初めて全体知である密教の智が実現されるとする。

本論文の意義は、第一に伝統的な宗学から比較的自由的な視点から空海の密教思想を考察した点にある。勿論そのような視点からの研究が他にないわけではなく、最近では心理学や哲学あるいは言語論などの立場から空海を研究する試みがなされている。しかし本論文のように、空海の密教思想そのものを正面から取り上げた研究は極めて少ない。次に本論文が、主として西洋哲学にお

いて用いられてきた概念や術語によって空海思想の骨格を表そうとしている点も注目されるべきである。それによって難解をもって鳴る空海思想が見通しの良いものになり、後学の者にとって貴重な指標が与えられたことは高く評価される。ただしその際にこの種の試みに伴いがちな、概念の理解や術語の使用に問題点が残されたのも事実であり、今後の研究において解決されることを望まれる。しかし本論文が仏教思想の研究のみならず、広く哲学および宗教学の分野にも多くの示唆を与えることは確実である。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。